田中光子著
ふくい女性史

＝近代福井の光と陰に生きる＝

三上一夫

明治以後、県内でたくましく活躍した代表的な女性二〇余名を選び出し、日本の近代化路線のうえで自ら主体的に新しい時代の創出のため、それぞれの分野で懸命に生き抜いた女性の赤裸々な姿を鮮明に描き出している。

そこで全体で九つの主題を設定するが、まず「近代黎明期の女たち」では、歌人の山川登美子、羽二重王国の基礎を築いた細井順子、女子教育の灯を掲げた禿すみを取り扱い、「新しい機業に生きた女たち」として、近代看護の草分け・戸村よしを、代表的な助産婦・納村千代を選び、また「新しい女たち」には、「新しき村」の武者小路房子、主婦連を創設した奥むめお、女流作家の真杉静枝、つぎに「創造に生きた女たち」では、〝新しいもの〟を考案した大塚末子、「廓の子」を書いた情熱の作家・加藤てい子、また「事業に生きた女たち」として、平岡脳病院を開設した冨田千代、ざん新な経営で成功した木瀬すて、さらに「福祉に生きた女たち」では、岡保母子寮の創設者・近松秀子、社会福祉行政をになった植山つる、いっぽう「抵抗をつらぬいた女たち」には、ひたむきな農民詩人・中野鈴子、辻久争議を主導した片岡コサヲ、また「伝統を継いだ女たち」に、大陸の花嫁として生きた俳人・井筒紀久枝、石田縞を再現した吉川道江を掲げ、最後に「草の根の女たち」として、関東艦遭難者を救助した〝糠（現、南条郡河野村）の女たち〟、市民に「夢」を贈った〝だるま屋少女歌劇〟、産小屋の歴史のなかの〝白木（現・敦賀市）の女たち〟など女性グループのかつ目すべき動向を、生き生きとした明快な筆致で描いている。

従来これらの女性の一部を紹介した著作はあるが、このような主題別のユニークな構成による女性史と銘打ったものがなかっただけに大いに着目したいところである。しかも本書は、単に記録・文献に基づくばかりでなく、自らの足で調べ、自分の耳で確かめるという精力的な取材活動を基底とした点には、全く敬服のほかはない。

著者は福井県立道守高等学校の女教師で、また「日本海作家」の同人としても意欲的な活動をしているが、本書は去る五〇年一月から翌五一年一月まで、福井のタウン誌「フェニックス」に連載されたものを一本にまとめたものである。

本書に「序文」を寄せた岡山大学教授杉原丈夫氏も「田中さんはこの研究上の常道を忠実に実行しておられる。（中略）故に本書のもっとも価値ある部分は、田中さんのいわば野外作業ともいうべき方法によって収集された資料であろう」と、賞揚するが、たしかに著者の真しな研究態度や取材活動こそ、本書に対する評価を一段と高めるものと考えてよい。なお付記の年表も福井の女性史を理解するうえで、はなはだ好都合だといえる。

（フェニックス出版、三四九ページ、一五〇〇円）